

健康な体
誠実な心
豊かな知性

東雲 しののめ

尾張旭市立東中学校
学校だより
平成30年度 第12号

今週は、多くの3年生が私立学校の受験に挑みます。

がんばれ！3年生！

「笑顔」の力



校長 水野 茂

「全豪オープン 大坂なおみ 優勝！」うれしいニュースが日本中を駆け巡りました。全米オープンでの優勝に続く快挙です。クビトバ選手との決勝戦に、固唾を呑んで見入っていた人も多かったと思います。両者ゆずらない第1セットの中、大坂選手のサービスゲームの時に、笑顔でボールを受け取るシーンが何度か映し出されました。コートの周りで二人の選手を全力でサポートするボールボーイ・ボールガールに向けての「ありがとう」の笑顔です。最高に緊迫したゲーム展開の中でも、周りの人たちに心配りができる21歳の大坂選手の精神力に驚くばかりです。ボールを渡した人たちも、心の中で大坂選手を応援していたのかもしれない。そして、彼女の「笑顔」が、きっと大会の優勝にもつながっているような気がしていました。そんな時、始業式の頃に発行された、ある2年生クラスの学級だよりを思い出しましたので紹介します。



…毎日を過ごしていると、良い事がある日もあれば、嫌なことが起こる日もあります。嫌な事があった日に笑顔でいるのは、とても難しく、思わず嫌な気分を顔や態度で表してしまうもの。嫌な顔をしていると、なんとなく周りの人にもその気持ちが伝わってしまい、辺り一面、嫌なムードをつくりだしてしまうこともありますよね。仕方ないと言えば仕方ないことですが、嫌な事があったときこそ、ぐっとその気持ちをこらえて、自分が笑顔でいることができれば、その笑顔に周りの人も幸せな気持ちになり、楽しいムードが生まれ、結果的に自分の嫌な気持ちが和らぐこともあります。……中略……その日の気分に関わらずに、いつも笑顔でいることができる人は、本当に強い人だと思います。笑顔でいれば、きっと良い事が自分におとずれます。日々の生活の中で、ちょっと心がけてみませんか。

その「笑顔」に、多くの人たちが何か幸せを感じた全豪オープンの大坂選手。周りからの大きな応援を得て、優勝、そして世界ランク1位。「笑顔」の力によるところも大きかったのではないのでしょうか。

青少年健全育成推進大会

1月26日(土)、第33回尾張旭市青少年健全育成推進大会が、名古屋産業大学ホールで開催されました。東中学校からは、「善行青少年」に3年生 梅屋丞生さんが、「健全育成ポスター」の部で少年センター所長賞に1年生 永谷星七さんが表彰を受けました。また「僕の意見、私の意見」において、2年生 水野 空さんが「考えよう 友達とのつきあい方」と題して、互いに切磋琢磨し高め合える友達、かけがえない友達について、意見発表をしました。



立春は、冬至と春分の間の2月4日頃に当たります。冬と春の分かれる「節分」の翌日で「寒さがあけて春に入る日」いわば春の初日です。旧暦では、一年の始まりは立春からと考えられていました。寒さはまだ厳しいですが、その中にもきっと、春の訪れを告げるものが見つかると思います。

※ 裏面は、人権作文コンクールにおいて優秀賞に輝いた加藤美幸さんのすてきな内容の作文です。

愛知県人権作文コンクール優秀賞作文 「思いやりの心」 3年 加藤美幸

(もうちょっと早く歩いてくれればいいのに。みんな待ってるんだから)

母の車に乗っていて左折しようとした時、高齢の女性がゆっくりと横断歩道を渡り始めた。とてもゆっくりと歩いている。私は塾に遅れそうだったので、イライラしながらそんなことを思ってしまった。私たちの車が左折できないので、後ろにいる車も直進できずにつまんでしまい、青信号なのに渋滞していた。たぶん、後ろの車の運転手も同じ思いだったと思う。歩道の信号機が点滅し始めた頃、やっと私たちは左折できた。そして塾にぎりぎり間に合った私は、その高齢の女性のことなどすっかり忘れていた。

そのしばらく後、私は左足を疲労骨折してしまった。三か月間、運動停止と医師に言われ、走ることもできなくなってしまった。階段を上るだけで左足が痛み、長い距離も歩けなくなった。体育の授業も見学し、部活は休部することになった。今まで普通にできたことが急にできなくなり、不自由さを味わうことになった。身体的にできないことが増え、みんなと同じ事ができなくなってしまった不安や焦りが、私を一層落ち込ませた。

そんな私を支えてくれたのは友達だった。音楽室などに移動するときも、一緒にゆっくり歩いてくれた。短い放課の間に急いで移動しなければ間に合わないのに、走ることも私に合わせて歩いてくれた。私は迷惑をかけてしまって申し訳ない気持ちでいっぱいだった。「ごめんね。私、走れなくて」と私が言うと、友達は、「全然、大丈夫だよ」と笑って答えてくれた。その時、私は不安から解放された気持ちになった。

こうして私は身体的にも精神的にも不自由な経験をし、三か月後ようやく左足は完治した。

夏休み、久しぶりに私は祖父母に会いに母の実家に行った。以前会った時よりも祖父母はいくらか元気がなく、意識的に明るくふるまっている印象を受けた。祖父母に聞いてみた。昔に比べて身体が動きにくくなってきたという。少し動いただけでも疲れやすくなったこと、手の力も弱ってきてビンのキャップなどが開けづらくなってきたことなど教えてくれた。祖父は若いときより5cmも身長が縮んだと言っていた。「若いときには当たり前でできたことが、年を重ねるにつれて、だんだんできなくなっていくんだよ」と、少し悲しそうな目で教えてくれた。

祖父母の話聞いて、私は以前横断歩道を渡っていたあの高齢の女性のことを思い出した。私にはゆっくり歩いているように見えたが、もしかしたらその女性は青信号の間に渡りきろうと、いつもより早足で歩いていたのかもしれない。私だって左足をケガしていた時、他の生徒のように階段を早く上ることができなかった。あの時、とてもつらい思いをした。でも私には一緒に待って見守ってくれた友達がいた。一方、私はあの高齢の女性をあたたかい目で見守ることができなかった。自分が急いでいたため、自分の基準で物事を考えてしまったのだ。今さらながら、あの女性に対して申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

帰り際、祖母はこんな話もしてくれた。「美幸ちゃんと私たちは離れて暮らしているけれど、美幸ちゃんが周りの人に対して思いやりの気持ちをもつことで、まわりまわっておばあちゃんのところまでその思いやりの心がとどくからね」。

私たちの社会には、さまざまな人たちがいる。そして誰もが安心して暮らす権利をもっている。しかし、横断歩道の時の私のように、自分の基準で物事を考えるような人ばかりの世の中になってしまったら一体どうになってしまうのだろうか。きっと他人がどうだろうと自分さえよければいいと、自分勝手に無責任な社会になってしまうだろう。

それでは皆が安心して暮らせるようになるにはどうしたらよいだろうか。幸い、私たちには想像する力が備わっている。相手のことを尊重し、思いやる力をもっている。一人ひとりが相手の状況を想像し、思いやる気持ちをもってあたたかい目で見守ることができれば、誰もが安心して暮らすことができると思う。

私が左足をケガしたとき、友達は私のつらい状況を思いやってくれた。そして一緒にゆっくり歩き、見守ってくれた。私も周りに対して思いやりの心をもつようにしたい。そうすれば、まわりまわって祖父母のところのみならず、社会全体に思いやりの心が届く。そしてみんなが安心して自分らしく暮らせる。そんな、まあるく、あたたかい社会になればいいと思う。

